

安楽寺寺報

聞光

第63号
第降誕会号
2012/5/21

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

「もの」はなつじゆ 「こと」はなつじゆ
信楽峻磨

親鸞は、真宗の教えを語るについで、いつも「もの」のはなしと、「こと」のはなしを明確に区別して明かしております。

その「もの」と「こと」の違いは、たとえば、「生命」といえば、それは客観的、抽象的な観念の世界で捉えられた「もの」(名詞)を意味しますが、それを「生きる」と表現すると、それは具体的な経験の世界で捉えられたところの、動態としての「こと」(動詞)で、そこには必ず主語がともないます。

「生命」という、主語のない「もの」と「生きる」という、主語をもつた「こと」の相違です。すなわち、仏とか名号とは、一般

には、客観的な「もの」として捉えられますが、親鸞は、その阿弥陀仏や名号を、「もの」ではなく、つねに具体的な経験、「こと」として捉えるわけです。

そのことは、たとえば、親鸞は、真宗における行とは、私の日々の称名念仏だといいますが、また時には、それを私の名号そのものだともいいます。すなわち、行とは私における称名でありながら、それはまた、阿弥陀仏の名号だともいうわけです。親鸞の著作を見ると、称名のことを名号といい、名号のことを称名ともいっております。すなわち、仏の名号とは、単なる仏の名前、物体としての「もの」ではなくて、私における具体的な「こと」であり、私が日々において称えるところの称名念仏は、それはそのまま、私の私に対する名のり、その喚び声だということです。

だから、仏の名号と私の称名とは即一するというわけです。しかし、本願寺の伝統教学では、その名号を抽象的な「もの」として捉え、その名号の中には、いろいろのパワー、功德がこもっているから、それを「もらう」ことが肝要だと教えます。かくして真宗の法義が、もっぱら二元的、観念的な「もの」の説明にわたって、具体的な「こと」としての経験にならないのです。

そのことは、また真宗における信心についても同じです。親鸞は、信心を、時には真実心といつて、それが仏心のことであるとも言います。かくして親鸞は、私における信心とは、その仏心が私に届いていることに、深く「めざめ」ていくことだといえます。すなわち、仏心のほかに私の信心はありえないというわけです。その意味において、



信行両座

私の信心とは、まったく具体的な経験の世界のことで、それはまさしく、私における「こと」(動詞)のはなしなのです。『歎異抄』に、他方の信心について、「たまわりたる信心」とあかすは、そういうことを意味しているわけです。しかしながら、本願寺の伝統教学では、その信心を、まったく主客二元論、対照的に「もの」として捉えて、仏を信じることは、私が仏に向かつて、一心一向に「たむ」ものであり、またその名号を「もらう」ものだと説明いたします。したがって、そこでは、その信心とは「こと」として、具体的に経験されることはありません。

かくして、まことの親鸞の教えは、行も信も、単なる「もの」のはなしではなく、私における確かな動態としての、「こと」について明かしたものにほかなりません。

安楽寺マンガ通信

信楽めぐみ作

★安楽寺ホームページ開設★
★<http://www.k-anrakuji.jp>★
念願の安楽寺ホームページを開設いたしました。今のところ安楽寺の紹介の簡単なものですが、これから時々更新して、色々な発信をして参りたいと思います。是非アクセスしてみてください。

★またご感想なり、ご意見なりをいただけますと、よりよいホームページになるかと思しますので、ご協力よろしくお願ひ申し上げます。

★ひかり幼稚園ホームページ★
★<http://hikari-kure.ed.jp>★
ひかり幼稚園も4月にホームページを刷新いたしました。子ども達の幼稚園での生活が見られるようになりました。是非ご覧下さい。

東日本大震災一周忌自浄法要義捐金
¥32,641円
浄土真宗本願寺派「東日本大震災支援金」に送金いたしました。
ご協力ありがとうございました

六月	永代経	日時 6月8日(金)朝・昼 6月9日(土)朝・昼 講師 美祢 正隆寺 波佐間正巳師 テーマ 「いろいろな宗教を比較して」
七月	安居会	日時 7月1日(日)朝・昼 講師 岡山 浄福寺 山下義円師 テーマ 「凡夫」
八月	歡喜会	日時 8月13日(月)14日(火) ※両日とも10:00~1席のみ 講師 信楽峻磨前住職 テーマ 「先祖の日に思う」
九月	彼岸会	信楽美代子前坊守一周忌法要 日時 9月23日(日)朝・昼 講師 信楽峻磨前住職

四月・五月と、大変痛ましい事故が続きました。四月の中旬には、京都の祇園、白昼花見客で賑わっている八坂神社近辺で、自動車暴走し、一九名の死傷者を出しました。ニュースで映し出される現場はよく知っている場所だけに、驚きました。また、金沢から東京への高速バスが防音壁に突っ込み、四六人も死傷者も出ました。亀岡では学校へ登校中の小学校の子ども達の列に、無免許で居眠り運転の少年の運転する車が突っ込んできて、一〇名の死傷者。と次から次へと事故が起き、その度に多くの方が驚きと悲しみにくれています。

今この原稿を書いている間にも、また新たな交通事故のニュースが次々と入ってきており、このところ不注意による交通事故が続いています。「何でこんなことが起こるのか」、「何でこんなことになるのか」と誰もが思うのではないかと思います。

また被害者の家族にとっては、その思いが一層強く、心が引き裂かれそうな苦しみと悲しみ、そして恨みの中に沈み込んでいるのではないかと、思います。そして私たちは、持病を持ちながら運転した運転手が悪いんだ、あるいは居眠り運転をしていた運転手が悪い、無免許の少年が悪いといった、その加害者を責めるのです。確かにその事故を起こした加害者が悪いということは間違いありません。またそれを責めなくては、何の前触れもなく突っ込みという間に奪われた、身内のいのちの意味が受け止められないのではないかと思います。

しかし立ち止まって考える時、そして仏教の教えに立ち返って考える時、決してその事故を起こした加害者だけが悪いだけで、すむ話ではないように思うのです。

昔子ども会で子ども達と見た地獄のビデオに、鬼が罪人を責めながら罪人に「今おまえがこのように苦しむのは、人のせいではない、自らの罪業なのだ。自業自得の報いなのだ。」と言います。そしてその時に「心にしがたつてはならない」と何度も言

います。このことを往生要集には「心はこれ第一の怨なり。この怨をもつとも悪となす。」とあります。これは、今の苦しみは私たちの心が作ってきたということではないかと思ふのです。

前住職の話にもよく出てきますが、一〇〇〇年の歴史を持つ交通安全の神様というコマージュルをする神社があるそうですが、一〇〇〇年前の交通安全の神様がいたとしても、まさかこうした、一度に何十人もなくなるような交通事故は想定していなかったと思います。

なぜなら昔はこうした事故は起こりえなかったはずです。人と人がぶつかるぐらい、あるいは荷車にぶつかると、馬に蹴飛ばされるかです。大事故といつても、何人もなくなるということはないのではないかと思ふのです。それがなぜこんな大惨事になるようになったかといえば、人間が欲望をどんどん肥大させ、



絵本 地獄と極楽 焦熱地獄より

心のままに、便利と快適と快楽を追求し、科学によって様々なものを作ってきたからです。それが私たちの新たな地獄を作ることを見知らずに、突っ走ってきたのです。早く、快適に、楽にと欲望のままにあらゆるものを私たちは作ってきました。それが地獄の種ともなるものだったのではないのでしょうか。決してその科学の進歩が悪かったということではありません。私たちの繁栄の裏には必ずそうした地獄が潜んでいるということです。私たちの周りを見回してみると、あらゆるものがそうです。今問題となっている原発もそうです。私たちの欲望をとことん満たす電力。それを支える夢の発電は、自分たちでは消すことのできないような大きな火です。自分で管理できるほどの火ならば、どうにかなるかも知れませんが、しかし消すことのできない、近づくこともできない火を発してしまっ

ら、それによってより大きな地獄を作ることは一目瞭然です。私たちが欲望を元に作り出してきたものは、快適さや利便性や快楽だけではなく、その裏に常に地獄を作り続けているというのを忘れてはならないと思います。

未だにその消えない火をまた発せようという人たちがいます。これが無明、無智の煩惱具足の凡夫といわれる人間なのだと思ふのです。安全を願いながらも、危険な欲望の心の方が勝ってしまうのです。源信僧都の書かれた往生要集、鬼と地獄の亡者の会話は、今から私たちがたどり、なぜ私たちがこんなに苦しまなければならないのか、と疑問を持つ私に、「何を言っているのか。他人が作った苦しみにやない。他人が作った地獄じゃない。自らが作り、自らが苦しむ、自業自得の地獄じゃないか。あれほど心に引きずられてはならぬといったにも関わらず、それに耳を傾けず、何を今更。」とまた打擲を受けるのではないのでしょうか。人間はそういう歴史をずっと繰り返してき、また繰り返していくのだと思

います。だから仏法にあえと、地獄の鬼は言っています。

車の恩恵にあずかる私は、その快適さと共に、今度はいつ何人もの方々を事故に巻き込み、多くの人々を悲しみのどん底に陥れ、深く恨まれる時が来るかも知れません。できる限りそうした事がないように気をつけなくてはなりません。それはわがかりません。あるいは逆もあり得ます。私の身内が不注意による事故に巻き込まれるかも知れません。しかしそれはどこかで、私たちみんなが作ってきた地獄ではないかと思ふのです。事故が起こるのは人の心の善し悪しだけでありません。親鸞聖人は業縁によってどのような状況も起こりうる人生であるといわれます。

「私は大丈夫」が大間違いの元です。安全神話といえます。そうです安全は神話です。作り話です。この世は娑婆で火宅です。必ず事故は起こります。そのことどこかで気づきつつ、物事を考える智慧が必要なのではないかと思ふのです。今この時代、この現代人にこそ地獄の思想が必要なのだと仏教は教えます。

仏事のイロハ

帰敬式と法名

「本山で法名を頂いたら…」と、あるご門徒に勧めたところ、「えっ？あれは死んでからもらうものじゃないのですか。」と聞き返されました。「釋〇〇」という法名は「死んでからの名前」と思っている方がいるのです。

確かに、亡くなった時に、お手次ぎのお寺のご住職が、その方に法名をつけ、葬儀に臨まれるケースが多くあります。しかしそれは、あくまで「緊急」の処置で、本来の姿ではありません。

法名は生きてこそ時に授かる

ン・ネームのようなもので、主に本山で行われる帰敬式(おかみそり)を受けた人に対して御門主から授与されるものなのです。つまり「仏教徒の自覚を持って生きる」証の名前であり、生きている間に授かるべき性質のもので、葬儀の時、導師のご住職が「お

も、法名というものは、「仏教に帰依した人の名前」(キリスト教のクリスチャ

も、法名というものは、「仏教に帰依した人の名前」(キリスト教のクリスチャ

